

令和 2 年 7 月 5 日現在

機関番号：32617  
 研究種目：基盤研究(B) (一般)  
 研究期間：2017～2019  
 課題番号：17H02597  
 研究課題名(和文) 日本のディスタンクシオンと社会構成意識 ―新しい文化資本と実践・意識の多元性

研究課題名(英文) Cultural Capital, Social Consciousness and Class in Japan

## 研究代表者

片岡 栄美 (KATAOKA, Emi)

駒澤大学・文学部・教授

研究者番号：00177388

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,800,000円

研究成果の概要(和文)：P.ブルデューの社会学理論をベースに、文化実践・テイスト、価値意識の全国調査(N=1272)を実施し、現代日本の差異空間、ライフスタイル空間の特徴を解明した。音楽や食、スポーツ等の文化実践を文化的雑食性の観点からデータ解析すると共に、成人と大学生へのインタビューから文化の意味作用と社会階層の関係を詳細に検討した。大学生への質問紙調査を全国サンプルで実施し、学生たちの象徴闘争の実態と男性支配文化について体育会系を中心に検討した。イギリスの著名研究者を招いてのワークショップを開催した。代表者は「趣味(テイスト)の社会学」の研究をまとめて出版したほか、食の社会学の海外研究書を共同で翻訳し出版した。

## 研究成果の学術的意義や社会的意義

現代日本における文化実践とテイストが価値観や社会意識との関連をもちながら、いかなる分化を示すかを文化マップとして提示するとともに、社会階層による文化実践の差異が縮小し、文化的雑食性(文化的オムニボア)が増大していることの現代的意味を検討した。質問紙による全国調査を実施した結果、現代日本の文化ライフスタイルは年齢やジェンダー、学歴、職業によって多様化しているだけでなく、空間テイストが重要であること、またメディア利用、社会意識とも関連があり、差異化の原理を明らかにできた。また大学生の象徴闘争をブルデュー理論で解明し、男性支配文化に彩られた体育会系アイデンティティの特徴を明らかにすることができた。

研究成果の概要(英文)：We examine the social space and life-styles in contemporary Japan, based on quantitative survey data in Japan, using Bourdieu's theory and cultural omnivorousness. We conducted random sample survey (N=1272) in 2019 and interview survey on cultural practices, taste and habitus in different cultural fields. Findings are shown as 3 dimensional cultural map. College students survey was also conducted on culture, taste and values. Sports-oriented college students show non-democratic values regarding gender roles and attitudes of masculine dominance.

研究分野：文化社会学

キーワード：文化 ライフスタイル 文化的オムニボア 文化資本 ハビトゥス 価値観 ブルデュー スポーツ

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

趣味やテイストをめぐる社会学はフランスの社会学者 P.ブルデュの著書『ディスタンクシオン』が日本に紹介されて以降、日本でも実証的に検討され、本研究代表者によって日本が文化的オムニボア(雑食)であることが1995年SSM全国調査から明らかにされてきた。しかしそれ以降の全国調査では、文化実践について十分な実証研究は行われず、また社会も情報化、ICT化で大きく変容し、商品化されたグローバル文化も席卷してきた。この30年間での社会変容が文化実践やライフスタイルに与えた影響を明らかにする必要がある。とくにポスト・ブルデュといわれる研究動向が広がり、文化的オムニボアや多元的ハビトゥス論、文脈といった概念で、社会階級と文化の関係を読み解く研究視点が豊かになってきた。しかし文化実践と社会階級との関連をみているだけでは、現代文化の複雑性や断片化した状況やその意味は読み解けず、またオムニボア(雑食)化は音楽、食、読書など多様なジャンルで拡大し、文化による差異化の意味を根底から検討しなおす必要がある。新しい文化資本や象徴的境界の現代的な在り方を見出す必要があるのである。

### 2. 研究の目的

本研究は、ICT技術の日常生活への浸透やグローバル化と共に勃興しつつある、「新しい文化資本」とは何かを明らかにするために、音楽や食など複数の文化領域での文化実践を調査するとともに、社会意識や価値態度、メディア利用との関連を解明し、現代のライフスタイルとそれを支えるハビトゥスの現代の特徴を捉えることにある。文化実践やテイストと社会階層との関連だけでなく、社会構成意識(文化的寛容性や他者信頼、男性支配文化への賛否、分配をめぐる政治意識など)との関連を検討することを通じて、社会が文化のもつ象徴的な力を通して分断化する方向にあるのかどうかを検討することを目的としている。とくに文化的雑食者(文化的オムニボア)と呼ばれる人々が増加し、高級文化による社会的差異の提示は縮小したといわれるが、大衆的な商業文化が席卷する現代日本では、ライフスタイル空間(差異の空間)はどのように分化するのか、P.ブルデュの文化社会学とそれ以降の新しい研究動向を取り入れて、日本版の『新ディスタンクシオン』研究を行う。またハビトゥス概念についても、多元的ハビトゥス論を中心に、理論的に検討する。

### 3. 研究の方法

ブルデュ社会学を基礎としつつ、理論的な検討と実証的な検討を行い、相互浸透をさせることで、日本版の「新ディスタンクシオン」調査研究を行った。

(1)実証面では、文化実践・テイスト、社会構成意識を含めた質問紙調査を作成し、全国調査を実施(2019年2~3月、有効サンプル1272名)し、現代日本の差異空間、ライフスタイル空間の特徴を多重対応分析やその他の多変量解析法を用いて明らかにした。

(2)量的な調査のみならず、質問紙調査の回答者の中からインタビュー調査に協力してくれる成人対象者に対し、文化実践と社会構成意識の詳細について詳細なインタビュー調査を実施した。

(3)大学生の文化実践とハビトゥスの分化を解明するために、インタビュー調査のあと、質問紙調査を予備調査(2017年)と全国調査(2018年)で実施した。

(4)イギリスの著名な文化研究者との交流を広めるとともに、東京でワークショップを開催し、研究交流を図った。理論的な検討も行い、先行研究の日本への紹介も行っている。

(5)多元的ハビトゥス論を中心に、実践の多様性とハビトゥスの関係を実証的、理論的に探究す

る。

#### 4. 研究成果

ピエール・ブルデューの社会学理論をベースに、文化実践・テイスト、社会構成意識を問う質問紙調査を「文化と意識に関する全国調査」として2019年に実施し、1272名の有効回答を得た。また大学生への質問紙調査(予備調査2017年と全国調査2018年:20大学662有効サンプル)を実施し、大学生の象徴闘争の実態を明らかにした。また一部の調査対象者へのインタビュー調査を行い、実践とハビトゥス、社会構成意識の詳細な調査を行い、これらの実証データをもとに、現代日本の差異空間、ライフスタイル空間の特徴を検討し、以下のことが明らかとなった。

(1) 音楽、食等の多様なジャンルでの文化実践から、文化的オムニボア(雑食)は増加した。とくに若い世代では、正統文化への関心が低下しており、実践率に世代間の差が大きい。若年層ほど、商業主義的な大衆文化を好み、正統文化 vs 大衆文化という分化を見る限りでは、年齢とジェンダー差、学歴差が大きな要因となっていた。これは1995年のSSM調査全国データの傾向が顕著になったことを示しているとともに、男性のほうが大衆文化嗜好が強く、高学歴でもそれは同様である。クラシック音楽や美術館訪問といった正統文化実践は現代でも女性に多くみられるが、正統文化実践者の年齢層が上昇している。学歴とジェンダーによる差異は現代でも明確に存在している。40代以上の高学歴女性で正統文化の愛好者が多くなる。

(2) 若い年齢層に限定すると、商業主義的で大衆的な音楽趣味が拡大し、クラシック音楽の愛好者は減少し、正統文化全体の経験者率が減少している。出身階層の影響は存在するものの、弱まりつつある。とくに大学生においては、クラシック音楽などの正統文化を実践する率が低く、音楽ではJ-POPが主流で、洋楽志向(海外ロックなど)は過去に比べて減少していた。若者にとっての演歌はクラシック愛好と類似した位置にあることがわかった。また大学生では出身階層を表す親の職業や親の学歴による正統文化実践の差異がほとんど見られなかった。

(3) 現代のライフスタイル空間、すなわち差異の空間を理解するには、多様なジャンルの文化実践と社会的属性の関連をみるだけでは不十分であることが明らかになった。文化実践とともに、どのような場所を好むかといった空間テイストを含めた多重対応分析(MCA)を行い文化マップを作成した結果、空間テイストが現代のライフスタイル選択と実践にとって重要となっていることを明らかにした。(2019年日本社会学会テーマ部会報告)

(4) 食に関する海外の研究書を村井・片岡ほかで翻訳し、出版した(2020年7月刊行、『フディー』青弓社)

(5) イギリスの複数の研究者との交流を深め、ワークショップを開催した。

(6) 代表者の片岡は、これまでの研究成果を単著として刊行した(『趣味の社会学 文化・階層・ジェンダー』2019年9月、青弓社)

(7) スポーツ実践とハビトゥスの関連について、片岡は公開シンポジウムに招待され、論文を執筆した(2019年3月、『スポーツとジェンダー研究』17巻所収)。ブルデューの男性支配と象徴権力の理論を用いて、日本の大学生におけるスポーツ嗜好のアイデンティティをもつ学生の価値、態度、文化資本を、量的な調査データに基づき以下を明らかにした。

「体育会系アイデンティティの保持者は男女ともに、ジェンダー役割意識に関する非民主的価値と男性支配的価値を示した。彼らのコミュニケーション能力は高く、かつ男子体育会系の大半が権力志向でもある。とくに男性の体育会系は権威主義的価値観や伝統重視の価値観をより強く持っている。かれらは政治的な無関心を示す傾向が強く、マスメディアの情報を信頼しており、また一般的他者への信頼も高い。それゆえ、かれらは現在の社会体制を疑うことはあまりなく、社会の問題や社会の矛盾に気がつきにくいナイーブな存在でもある。また体育会系学生の文化資本は、他の学生よりも相対的に低かった。これらの価値態度、いいかえれば、ハビトゥスは近い将来の日本の保守的・非民主的な階層フラクションを体現するものである。」(片岡 2019, スポーツとジェンダー研究17巻所収論文の要約より抜粋)。

(8)大学生の文化実践とテイストが象徴闘争のツールであるとともに、学生のアイデンティティ・キットであることを理論的に論じ、体育会系やオタク、ストリート系など学生たちが自他を分類しカテゴリー化する実践の根底にある分類基準を明らかにした。複数のアイデンティティ自認のタイプが、異なる卓越化基準に基づいており、それが権力志向や性役割分業などの価値観とも関連をもつことも明らかになって、学生自己アイデンティティと無意識で実践している分類作用(〇〇タイプ)が学生たちの文化闘争、象徴闘争であることを解明できた(片岡 2018b、駒澤社会学研究 51 号所収論文)。

(9)文化実践の多元性とハビトゥスの関連について、検討した(片岡 2018a、駒澤社会学研究 50 号)ほか、村井(2020、社会学史研究 42 号)はブルデュ 社会学についての理論的検討を行った。

(10)川崎はグローバル文化の変容と文化政策についての検討をシンガポールを中心に行った。

(11)文化テイストが地域移動にもたらす効果について協力者の小股が全国調査データを用いて検討した。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 片岡栄美	4. 巻 17
2. 論文標題 象徴権力としてのスポーツと「体育会系」アイデンティティの特徴：ブルデュー理論からみた男性支配と体育会系ハビトゥス	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 スポーツとジェンダー研究	6. 最初と最後の頁 49-63
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 村井重樹	4. 巻 42
2. 論文標題 社会的行為者と社会的世界 ブルデュー社会学に対する批判と距離化に着目して」第42号	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 社会学史研究	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 片岡栄美	4. 巻 51
2. 論文標題 大学生の自己アイデンティティと象徴的境界の基準 - 体育会系、オタク、ストリート系等の関係性マッピング	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 駒澤社会学研究	6. 最初と最後の頁 1-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 片岡栄美	4. 巻 50
2. 論文標題 文化的オムニボア再考 複数ハビトゥスと文脈の概念からみた文化実践の多次元性と測定	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 駒澤社会学研究	6. 最初と最後の頁 17-60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 川崎賢一	4. 巻 22
2. 論文標題 After the Death of Lee Kuan Yew, is Freedom of Artistic Expression Possible in Singapore?	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Journal of Global Media Studies	6. 最初と最後の頁 15-28
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 片岡栄美
2. 発表標題 子どものスポーツ体験における格差・ジェンダー差と「体育会系」アイデンティティ 子ども期から青年期のスポーツ活動の社会学的検討
3. 学会等名 日本スポーツとジェンダー学会 17回大会シンポジウム (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 片岡栄美
2. 発表標題 文化的オムニボア再考 複数ハビトゥスと文脈の概念からみた文化実践の多次元性と測定
3. 学会等名 日本社会学会 第90回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 片岡栄美
2. 発表標題 「空間テイスト」による生活様式空間の再構成
3. 学会等名 日本社会学会 第92回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 村井重樹
2. 発表標題 現代社会における食の実践 ブルデューの食の文化社会学をめぐって
3. 学会等名 日本社会学会 第92回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小股遼
2. 発表標題 地域移動と文化実践との関係性 「文化と意識に関する全国調査」の分析 をととして
3. 学会等名 日本社会学会 第92回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 片岡栄美・小股遼
2. 発表標題 学生たちの象徴闘争 自己アイデンティティとハビトゥス
3. 学会等名 日本教育社会学会 第71回大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 片岡栄美	4. 発行年 2019年
2. 出版社 青弓社	5. 総ページ数 377
3. 書名 趣味の社会学 文化・階層・ジェンダー	

1. 著者名 ジョゼ・ジョンストン(著)、シャイヨン・パウマン(著) / (訳) 村井重樹・塚田修一・片岡栄美・宮下阿子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 青弓社	5. 総ページ数 470
3. 書名 フ ディー グルメフードスケープにおける民主主義と卓越化	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	村井 重樹 (Murai Shigeki) (00780230)	島根県立大学・総合政策学部・准教授  (25201)	
研究分担者	川崎 賢一 (Kawasaki Ken'ichi) (20142193)	駒澤大学・グローバル・メディア・スタディーズ学部・教授  (32617)	
研究分担者	廣瀬 毅士 (Hirose Tsuyoshi) (20571235)	東京通信大学・情報マネジメント学部・准教授  (32826)	
研究分担者	瀧川 裕貴 (Takikawa Hiroki) (60456340)	東北大学・文学研究科・准教授  (11301)	
研究分担者	磯 直樹 (Iso Naoki) (90712315)	慶應義塾大学・法学部(三田)・特別研究員(PD)  (32612)	学術研究支援部三田担当 kaken-mita@adst.keio.ac.jp



## 6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	小股 遼  (Omata Ryo)	明星大学・非常勤講師	
研究協力者	鳥越 信吾  (Torigoe Shingo)  (00839110)	十文字学園女子大学・社会情報デザイン学部・講師	